

琵琶湖博物館学芸員に尋ねる古代湖の不思議

400万年の歴史を知る

琵琶湖

面積670㎡、最大水深約103m。
その広大な湖は、長い時間の流れの中で、多くの固有種を育み、人間に食料と飲料水を与えてきた。

ミステリアスな歴史と生活史不明の個性豊かな生き物は、琵琶湖博物館を拠点に、研究者のみならず、私たちをも魅了する。

さまざまな時代を経て
現在地へ北上した琵琶湖

悠々と青い水をたたえる姿から「ウミ」と呼ばれ、渇水知らずの関西一円の水源として大きな役割を担う琵琶湖。海と同様に昼は湖から風が吹き、夜になれば陸風が吹く湖陸風など、独特の気象条件も持ち合わせる。広大な面積と豊富な水量は、多彩な生き物とそこに暮らす人々を潤してきた。

その起源は古く、約400万年前まで遡る。原型となった湖ができたのは、今の三重県伊賀市付近。これが地殻変動などによってゆつくりと北上し、形を変えながら、約40万年前、現在の位置に到達した。かつて湖の周辺部は亜熱帯気候の森林で覆われた時代や、湖の形が消えて沼や沢となった時代を経たとされるのが定説だ。実際、琵琶湖博物館に展示されたワニやゾウの化石はこの地域で発掘されたもの。見る人は目を



琵琶湖博物館 篠原 徹館長

疑い、琵琶湖の生い立ちに興味を惹かれるだろう。最近では、「湖の形がなくなった」という定説を覆すかもしれない、好奇心をかき立てられる研究成果も出ている。

「琵琶湖博物館では、現在見られる固有種がいつの時代から固有になったのかを調べる研究も行なっています。定説では、琵琶湖が現在地へ移動してきた40万年前以降とされていたのですが、ある魚が300万年前まで進化の道すじをたどれたという成果が出ました。これが事実なら、一般に川の環境だったとされる150万年前にも湖があり、この魚が湖に留まって進化したと考えるほうが自然なのです」と解説するのは、地質学を中心に琵琶湖周辺の環境の歴史を語る里口保文さん。どういった経緯で、どんな生物がいつどのような環境で暮らしてきたのか、謎は深まるばかりだが、ほかにも琵琶湖をめぐる謎は多いという。

たとえば、琵琶湖はラムサール条約に指定されているように、その生態系の貴重さはよく知られていると

ころ。鳥類や淡水魚のほか、昆虫や水生植物など1700種類以上もの生物が暮らしているとされるが、この数字さえも大きく変わりつつある。

「琵琶湖に棲息する微生物の新しい発見が相次いでいます。世界で初めて見つかったこれらの微生物の暮らしぶりもまだ不明ですから、琵琶湖の生態系は、実はすべて把握しきれていないわけではありません」と篠原徹館長。生態系の

カギを握る生き物が、小魚などが食べる植物プランクトンなのか、はたまた大型魚のエサとなるコアユなのか、博物館内の研究者によっても意見が分かれるそうだ。

ほかにも、琵琶湖の北湖は時計回りに、南湖は反時計回りに水流があると一般にいわれていても、ほかに未解明な水流があるとささやかれたり、魚類の固有種が多くいても植物の固有種は少なかったりと、研究が進むにつれて好奇心と疑問が無尽蔵にわいてくる。「謎めいたストーリー」を解き明かしたい。それが醍醐味。力強く語るふたりの研究者の目から



ゾウの鼻のような器官を持つゾウミジンコ。こんな姿がリニューアル後の展示で見られるという。どんなミクロの生物が展示されるのか、期待も想像も膨らむところだ(写真提供/琵琶湖博物館)

は、抑えきれない興味の光が漏れ輝いていた。

飽くなき探究心が生んだ個性ある展示の数々

琵琶湖博物館では、琵琶湖の生い立ちや、そこに暮らす淡水魚をはじめとする生き物、研究の手法や裏側などを惜しみなく公開し、展示して

琵琶湖は

不思議の

玉手箱

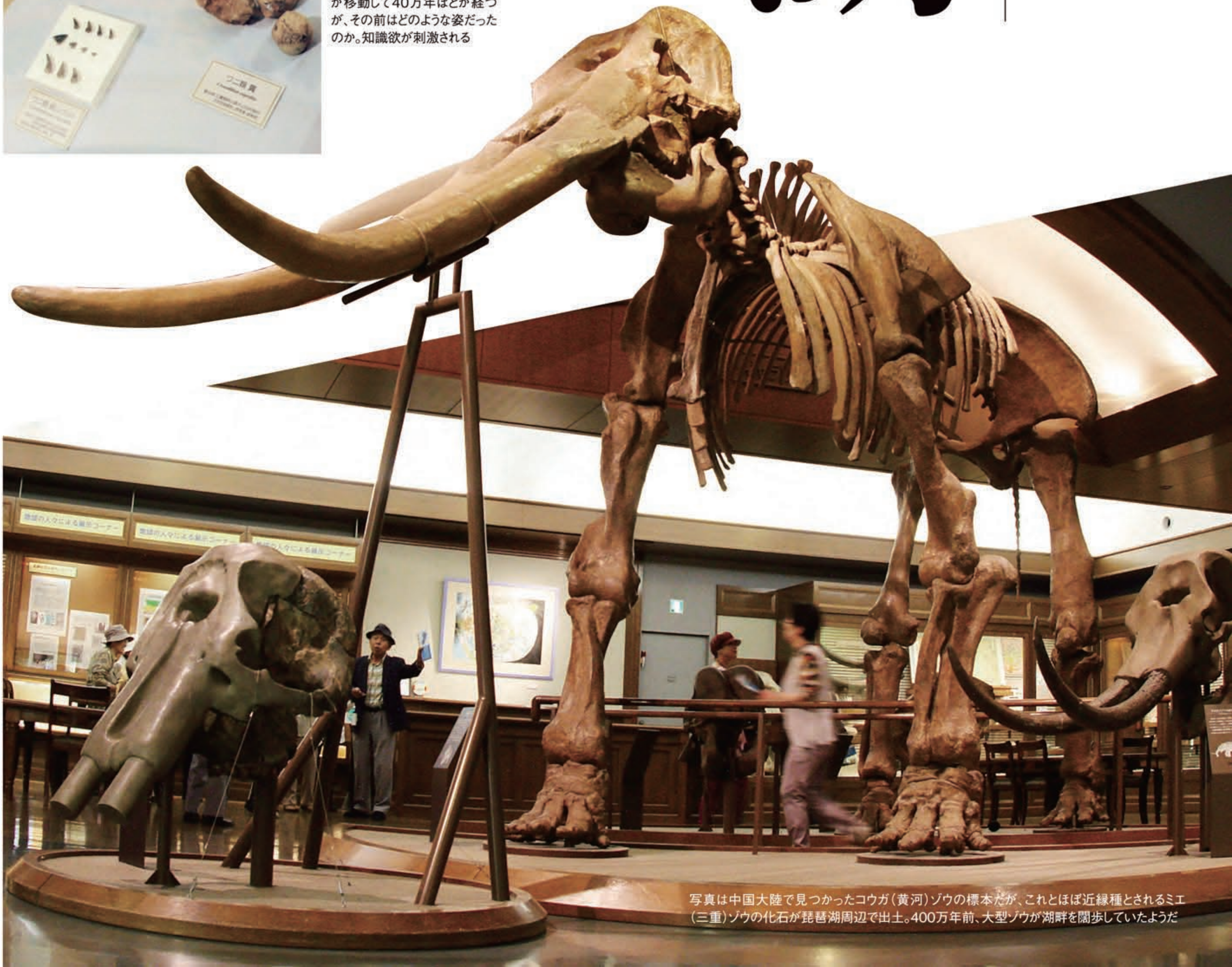
いる。展示方法は、見て触って学べる、いわゆるハンズオン展示を軸にしてお

り、市民とともに作り上げる参加型が多いのも特徴のひとつ。そして、開館から20周年となる平成28年には、長年にわたる研究結果を反映し、展示をリニューアルする。

「開館当時と比べて、研究水準は大きく向上しました。新たにわかつたこと、新たに浮かび上がった興味



琵琶湖畔にワニが暮らしていたという事実には戸惑いを禁じえない。現在の位置まで琵琶湖が移動して40万年ほどが経つが、その前はどのような姿だったのか。知識欲が刺激される



深い研究テーマを公開し、より開かれた博物館を目指します」と篠原徹館長の弁にも熱がこもる。そんなリニューアルの目玉のひとつは、普段、肉眼では見えにくい微小な生物が見られる「マイクロアクアリウム」。ミクロの生物たちのユニークな動きや幾何学的な形を目の当たりにできる展示は、世界でも初めての試みとあって、大きな期待を集めている。現在の

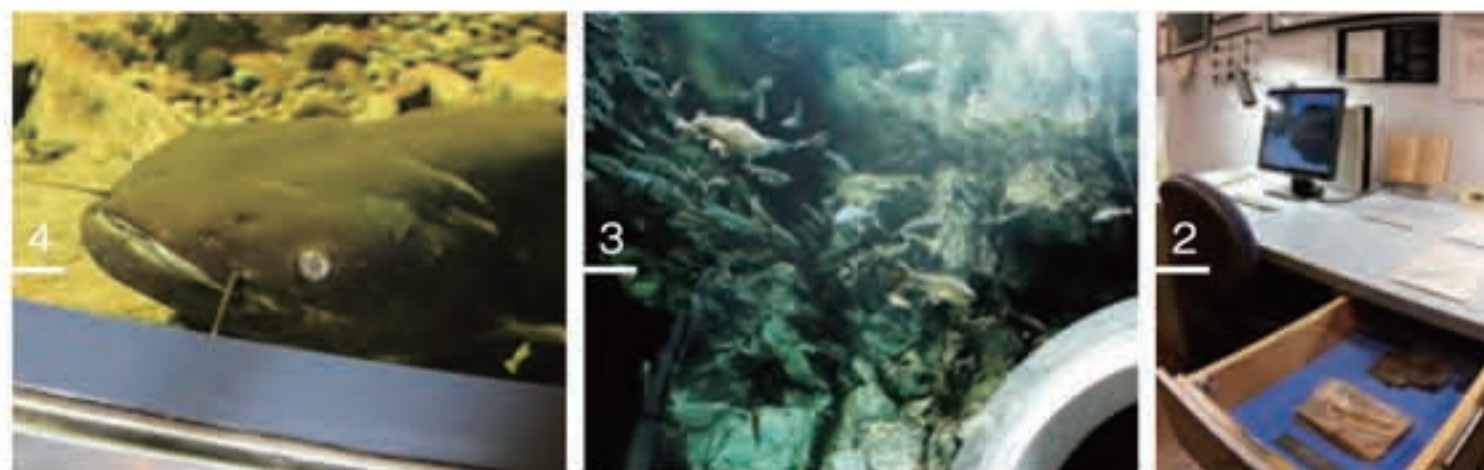
展示では、初めて見たときに里口さんが感動したという、900mもの地下を円形にくり抜いたボーリング標本や、出現する年としない年がある珍種「ミズクラゲ」など、知的好奇心をくすぐる展示が公開されている。

「琵琶湖博物館ならではの学術的に貴重な資料も多く、またかなり細かい部分まで凝って作っています。見れば見るほどにおもしろいですよ」。里口さんが太鼓判を押す展示は、どれもさまざまな分野の研究者の努力が結晶したものばかり。琵琶湖の不思議な魅力を、これまで以上に体感させてくれるはずだ。

琵琶湖博物館

住所/草津市下物町1091
TEL/077-568-4811
開館時間/9:30~17:00
(最終受付16:30)
定休日/月曜日
(祝日の場合翌日休)、年末年始、
ほか臨時休業あり
入館料/大人750円、高校生400円、小・中学生以下無料
※草津市立水生植物公園みずの森との共通券や年間鑑賞券、
団体割引もあり(20人以上)
WEB/www.ibm.go.jp/

2/研究者のデスクを開けて資料を見たり、受話器を手に取って解説を聞いたり。博物館内には、手にとって学べるハンズオン展示が多く、子どもたちも楽しく学ぶことができる
3/琵琶湖で暮らしている淡水魚が悠々と泳ぐ水族展示。琵琶湖の魚類には固有種も多いが、こうした固有種が生物種として育まれるには数万年~数十万年の時間が必要だ
4/薄暗い水槽に静かにたたずむのは、琵琶湖固有種のビワコオナマズ。約1mlにもなる大物だ。琵琶湖固有のナマズには、ほかにイトコナマズが挙げられる



1/地層を指差しながら解説する、研究部環境史研究領域専門学芸員の里口保文さん。博物館建築前の地層の資料は、その火山灰の堆積量などからいつ噴火があり、琵琶湖畔に暮らす人間たちに影響を与えたかを物語る

写真は中国大陸で見つかったコウガ(黄河)ゾウの標本だが、これとほぼ近縁種とされるミエ(三重)ゾウの化石が琵琶湖周辺で出土。400万年前、大型ゾウが湖畔を闊歩していたようだ